

モリエールをめぐって

——マドレーヌ・ベジヤールとアルマンド・
ベジヤールの関係について——

窪川英水

1662年2月20日、モリエールはアルマンド・ベジヤールとサン・ジェルマン・ロクセロワの教会で結婚式を挙げた。モリエールは丁度40歳を迎えたばかり、アルマンドは結婚契約書の伝えるところによれば、《agée de vingt ans ou envi-⁽¹⁾ron》であった。

このアルマンドとマドレーヌの年齢が20歳も違っていたから、アルマンドはマドレーヌの私生児ではないかという疑がかけられているし、さらにはまた、マドレーヌがかつてモリエールの愛人であったところから、アルマンドはモリエールがマドレーヌに産ませた自分の子供で、モリエールはincesteの罪を犯しているという誹謗さえあがっている。

小論は、マドレーヌとアルマンドが親子であるか、それとも単なる姉妹にすぎないかを考察するものである。しかしこの問題は長い間論争の的となっており、今日でも決定的な資料の欠如から未だに解決されていないが、すでに発見された資料にもとづいて解明してみよう。

まず、モリエールと同時代の人々はこの問題をどうみていたかと言えば、モリエールやアルマンドに敵意を抱いていた側ではすべて、アルマンドはモリエールの娘であるとしている。モリエールに好意的な側では、ラ・グランジュやヴィヴオのごとく沈黙を守っているか、あるいはボワローのように前者の側と同じ見方をしているかのどちらかであって、親子の関係を積極的に否定している者は一人も見当たらない。

1663年、L'Hôtel de Bourgogneの俳優モンフルリは、モリエールが《L'Impromptu de Versailles》の中で彼を嘲笑したのを怒って、モリエールは自分の実の子と結婚し、incesteの罪を犯していると訴えている。

この経緯をラシーヌは友人のル・ヴァッセあての手紙につきのように記してい

1) E. Soulié: Recherche Sur Molière et sur sa famille p. 203.

る。

《Monfleury a fait une reguête contre Molière et l'a donnée au roi. Il l'accuse d'avoir épousé la fille et d'avoir autrefois couché avec la mère. Mais Monfleury n'est pas écouté à la Cour.》

それから数年後の1670年に出版されたモリエール誹謗書として名高い《Elo-mire hypocondre》でブウランジェ・ド・シャリュセは遠まわしに、モリエールが自分の娘と結婚したことを匂わせている。

Élomire

……Qui forge une femme pour soi,
Comme j'ai fait la mienne, et peut jurer sa foi.

Bray

Mais quoique par Arnolphe Agnès ainsi forgée,
Elle l'eût fait cocu, s'il l'avait épousée !

Élomire

Arnolphe commença trop tard à la forger ;
C'est avant le berceau qu'il y devait songer,
Comme quelqu'un l'a fait.

L'Orviétan

On le dit

Élomire

Et ce dire

Est plus vrai qu'il n'est jour……⁽¹⁾

さらにこれより10数年後(1683?)に出版されたこの種の中傷冊子《La Fameuse Comédienne》でも、アルマンドはモリエールの娘とされ、アルマンドを産んだ頃のマドレーヌの無軌道ぶりから、「誰が父親だか決めるのはむずかしいが、モリエールをのぞけば、相手にした男はみんな上流の人ばかりだから、娘に高貴の血が流れていることは母親も認めるところだ……モリエールがその娘の夫となったけれども、彼女はモリエールの娘と思われている。真実のほどはわからないが。」といった調子のひどい誹謗を試みている。

1) act I s. III. Élomire は Molière の anagramme.

1676年には、リュリィ毒殺未遂事件を起したギシャールという男が、この事件にアルマンの義姉兄が証人として不利な証言を行ったので、当局に提出し、後に公刊した《Reguête d'inscription de faux en forme de factum》でアルマンの人身攻撃を行っており、ここでは真向から inceste を持出している。

《Tout le monde sait que la naissance de la Molière est obscure et indigne, que sa mère est incertaine, que son père n'est que trop certain, qu'elle est fille de son mari, femme de son père, que son mariage a été incestueux……qu'en un mot cette orpheline de son mari, cette veuve de son père et cette femme de tous les autres hommes n'a jamais voulu résister qu'à un seul homme, qui était son père et son mari》

しかし、これらの連中がすべてモリエールまたはアルマンの中傷をねらった以上、マドレーヌとアルマンの親子関係はもちろん、モリエールの inceste まで持ちだしたとしても驚くにはあたらない。彼等の言うようにマドレーヌとアルマンがたとえ親子だとしても、モリエールが父親でさえなければ、もとの情婦の娘と結婚したところですからこしも罪を構成するものではなく、マドレーヌの身辺でも、もと彼女の愛人であったモデーヌ伯爵が情婦の娘と正式に結婚した例もあり、まして俳優の世界では、当代の乱れた劇団生活を語った例からみて、さして非難さるべき筋合のものではなかったと察せられる。彼等はモリエールを中傷するためには単にマドレーヌとアルマンが親子だということでは効果なしとみて、モリエールの inceste まで持ちだしたものと考えられる。

しかし、モリエールの inceste が問題とならず、単にマドレーヌとアルマンが親子だということだけなら、モリエール自身、彼に対して誠実だったラ・グランジュやその友人のヴィヴォたちのとった態度は不可解である。彼等はいずれも、このような誹謗に対して沈黙を守っているのである。

モリエールの結婚についてのラ・グランジュの記述についてみるならば、その第一のものは、1661年に、モリエールが結婚した場合に二人分の分け前を要求した時のもので、未だ結婚する相手の名前は記されていない。

Avant que de recommencer après Pâques au Palais Royal, M. de Molière demanda deux parts au lieu d'une qu'il avait [pour lui ou pour sa femme s'il se mariait]; la troupe lui acorda⁽¹⁾.

1) Registre p. 31. [] 内は後に La Grange が書き加えた箇所。

そしてこの記述のあとに、

M. de Molière épousa Armande-Claire-Élisabeth-Grésinde Béjard, le mardi gras de 1662.⁽¹⁾

と書き加えている。

その後、1662年2月14日の日付で、Visite chez M^e d'Equévilly とあり、その欄外に、

Mariage de M^r Molière au sortir de la visite
と簡単に記されている。⁽²⁾

ラ・グランジュはアルマン드의プレノンを長ったらしくあげておきながら、アルマン드의両親のことには一言もふれていない。しかるに一方では、Registreの初めに自分の妻の両親の名前をあげているのである。このRegistreは私的な記録であるから、何もラ・グランジュがアルマン드의出生にふれていなくても一向に差つかえないのであるが、モングレディアンも言っているように「ベジャール家がこの劇団で占めている地位を考えると、いかにも奇妙なことだ⁽³⁾」と思われる。

このことは1682年版のモリエール全集についても同様であって、全くこの問題についての記述はない。1682年という、モリエールが死んで10年近くも経っているのであるから、もうモリエールを直接に傷つけることもなし、一言あって然るべきところであると考えられるが、メナールが挙げている、序文が短かくてこの問題にはふれられなかった⁽⁴⁾、という理由はともかくとして、この全集がモリエール未亡人の依託を受けて出版されたエディションであれば、当然モリエールや彼女について不利な証言をするはずはないと考えられる。

それにしても、この点について十分な知識を持っていたに違いない彼等が、広くばらまかれた中傷、誹謗に対して、こうした公的なエディションで一言簡単にでもアルマン드에ふれて、それに答えるのがモリエールの友人として当然のことではないか、というメナールの説はもっともである⁽⁴⁾。

1) この日付は acte de mariage と較べると1日遅れているが、後から書加えたために生じた La Grange の記憶違いであろう。

2) G. Michaut は、この日には Molière が劇団の仲間を結婚のことで招んでいるふしがあるから、La Grange の誤りであろうとしている。Les débuts de Molière p. 148. N. 1.

3) G. Mongrédien: La vie privée de Molière p. 92. なお、La Grange は Madeleine Béjard の死亡の時にも Armande にはふれていない。

4) P. Mesnard: G. E. F. Sur Molière p. 250.

前述の *Registre* にしても、この全集の序文にしても、アルマン드의出生や両親について、まるで申し合わせたように全く沈黙し切っていることは、一つの態度を蔵しており、意図あつての沈黙と解せらるべきではないだろうか。

ラ・グランジュ、ヴィヴォと共に、モリエールの側にあつた人としてボワローの証言は重要視しなければならない。ボワローが友人プロセツトに語ったところによれば、

《Molière avait été amoureux premièrement de la comédienne Béjard, dont il avait épousé la fille》⁽¹⁾

としているのである。

この発言が、モリエール中傷のためのものならいざ知らず、モリエールと親交があり、モリエールの敵に対抗してモリエールを支持してきたボワローのものであるだけに、様々な解釈が下されている。

ミシヨールは、ボワローが正に《dont il avait épousé la fille》と言つたとしても、それだからといってこの問題のかたがついたとは考えられないとみている。それはボワロー自身も外見から誤つて考えており、友人としてこうした問題にたち入るのを避けたので、モリエールの方もボワローが誤つた考えを抱いているとはつゆ知らず、これを是正する機会がなかつたのではないか、あるいはボワローがこうした問題に興味がなく、単に世間の流説をくり返したのであつて、一寸したボワローの誤りにすぎないとミシヨールは解釈している。またそれに続いてミシヨールは、あるいはこれとは逆に、誤りはプロセツトの方にあつたのではないか、という見方も提出している。つまり、この証言がプロセツトのメモワールである以上ボワロー自身が《dont il avait épousé la fille》と言つたという確証はなく、ボワローが実際には《la sœur》と言つたのに、プロセツトが流説を信じこんでいて《la fille》としてしまったか、あるいはボワローが明らかに間違っているとプロセツトが勝手にきめこんで、流説の通りに直してしまつた、というのである。⁽²⁾そして、こうした誤りの例としてメナールの挙げている例を援用している。

メナールの例というのは、1673年5月10日、アルマン드가マドレーヌから相続した債権に関する事件（アントワーヌ・バラティエ事件）に判決が下された時のものである。判決の数ヶ月前、当事者の *qualité* がつぎのように記されている。

《Entre messire Antoine Hercule……et damoiselle Armande Grésinde

1) *Correspondance entre Boileau et Brossette*, publié par Laverdet. p. 515.

2) Michaud: *ibid.* p. 159-60.

Béjart, sa femme, hérétière de défunte Magdeleine Béjart, ayant repris l'instance au lieu de ladite défunte Béjart⁽¹⁾》

これには何等問題はない。ところがこの判決はモリエールの死後に下されたので、モリエールとアルマンドの名前と *qualité* が削除されて、つぎのように書変えられている。

《et damoiselle Armande Grésinde Béjart, veuve du défunt Jean-Baptiste Poquelin, comédien du Roi, hérétière de défunte Magdeleine Béjart, ayant repris l'instance au lieu de ladite Béjart.》

しかし判決文そのものにはアルマンドはマドレーヌの妹であるとされている。この違いは書記の不注意から出て来ているのは確かであろう。

ところで、ミショーの言うように、プロセットの伝えるボワローの言葉が、この書記の行ったあやまりと同様に、プロセットの誤りであるとしても、それはアルマンドがマドレーヌの娘であるという流説が強く一般に広まっていたことを裏書きするものであれ、あまりにも穿ちすぎたせんさくであって説得性に乏しい。

しかし、プロセットの記憶に誤りが多いことはすでに指摘されている⁽²⁾。ミショーはこのように誤りのある第三者によってもたらされた間接的であやふやな証言はとりあげられないと言っているが果してそうであろうか。

1730年8月23日付の J. B. ルッソー宛の手紙で、プロセットはボワローと俳優バロンから聞いた話しをもとにして、モリエールの生涯と作品の解説を作ること考えていると記している。そして、ボワローから話しを引出す模様について、

《M. Despréaux m'en apprenait, chemin faisant, beaucoup de particularités, qui ne seront point perdues, si Dieu me prête vie. Il m'avait même promis de me donner des éclaircissements suivis sur toutes ses comédies, mais je n'eus pas le temps de me livrer à cette occupation.》

と記している⁽³⁾。ボワローとバロンの二人の話しをもとにしようとしたのがもとで、バロンから聞いたことをボワローの耳から聞いたものと間違えたのではないかという疑いも一応生じて来るが、この手紙から察するところ、後にふれるグリマレのモリエール伝がバロンを多く *sources* とするものであり、またボワローが1662年3月12日付の手紙でグリマレをこっぴどくやっつけていることから、プロセ

1) Mesnard: *ibid.* p. 256-7.

2) cf. Ed. des Œuvres de Boileau, donnée par B. S. Prix. t. III. p. 166-98.

3) Ed. Les Belles Lettres. p. 204.

ットがバロンの発言を簡単にうけいれてしかもそれとボワローの発言とをとり違えたなどとはとうてい考えられないことである。また、プロセットがモリエールに対してかなりの関心を抱いていたことは確かである。そうだとすると、ボワローが本当は《sœur》と言ったのにプロセットが聞きあやまって《fille》としたとか、勝手にそれを《fille》と訂正したとするミショーの解釈はそう簡単にうけとれない。

それに、メナールの指摘しているように、この証言はボワローの生前の 1702 年に書かれたものであってみれば、もし誤りとすれば、その誤りを正すことをボワローは当然要求したに違いない。そして、ボワローの言っていることが、モリエールの敵や、信用できないグリマレの伝記と同じく、アルマンドとマドレーヌを親子としているからには、この短い記述の前後に、この問題に関しての文字とはならなかった二人の会話があったのではなからうか。

つぎにグリマレのモリエール伝であるが、グリマレの言うことに信用がおけないとしても、決して彼のモリエール伝がモリエールに対して悪意をもって書かれた本でないことに注意しなければならない。彼はアルマンドのことを《la fille de la Béjart》と言っているだけでモリエールの inceste の問題にはふれていない。ただ、モリエールとマドレーヌが秘密の結婚をしていて、マドレーヌの

《aimait mieux être l'amie de Molière que sa belle mère》

という気持から、マドレーヌに二人の結婚に反対をさせているが、秘密の結婚をしていたというのは明瞭な誤りである。またモリエールが過去において彼女の愛人であってみれば、たしかに彼女が反対したかも知れず、あるいはスキャンダルを恐れて結婚を阻止しようとしたかも知れない。だが、それがあきらめてのことであるにせよ二人の結婚契約書にはちゃんと署名しているし、後にふれる持参金の額とからみ合わせてみると、グリマレの言っているようには考えられない⁽¹⁾。

ところでグリマレは inceste の問題を全然知らなかったわけではないらしい。というのは多くのモリエール研究家によってグリマレがその著者だとされている《Lettre critique de la vie de Molière de M. Grimarest》にはつぎのような記

1) 前述の Registre にある二人分の分け前の要求の時から結婚契約書の日まで9ヶ月もあり、また契約書の日から結婚した日まで1月ほどあるので、この遅れは、マドレーヌから反対の横槍があったのが原因だとみるグリマレ同様の説もある。しかし俳優がいくらか長く休める時期をあとにひかえた carême の前に、お互に俳優である二人の結婚日を決めたとするミショーの説が自然である。

述があるからである。

A la sixième page, il nous prépare adroitement au mariage de Molière ; c'était un endroit délicat à toucher, car le public a de fâcheuses préventions sur cet article, et il n'aurait pas été mauvais de produire des pièces justificatives de ce qu'avance l'auteur pour anéantir le préjugé général. Je ne lui sais pourtant pas mauvais gré d'avoir essayé de détruire l'opinion commune, et je crois pieusement, et avec plaisir, tout ce qu'il nous dit, s'il nous avait donné le reste avec sincérité.

ここに見られる fâcheuses préventions とか le préjugé général, l'opinion commune とかはモリエールの inceste を措いては、ほかに考えられないことは、モングレディアン⁽¹⁾の指摘している通りである。グリマレとしては、アルマンドがマドレーヌの娘であるという点だけにとどめようと努めたのに違いない。

グリマレの伝記以後、18世紀に書かれたド・セールやヴォルテールのモリエール伝にしても、グリマレの焼直しで、アルマンドがマドレーヌの娘であるという点では皆一致している。

しかし、19世紀になって、L. F. ベッファラや E. スウリエの努力により、信用するに足る資料が発見されてから、この問題に新しい光がさしこんできた。そして驚くべきことは、これらの資料の全部が、正式に、アルマンドはマリ・エルヴェの娘であって、マドレーヌの妹であると規定していることである。すると問題はこれで解決したようであるが、これらの資料にも幾多の疑問が残っている。以下、この問題について、これらの資料を考察してみよう。

第一の資料は、1643年3月10日、マリ・エルヴェがシャトレ奉行所に提出した、彼女の夫ジョゼフ・ベジャールの遺産放棄の誓言⁽²⁾である。その中で彼女は、

《au nom et comme tutrice de Joseph, Madeleine, Geneviève, Louis et une petite non baptisée, mineurs dudit défunt et elle》

ということになっているが、まず問題なのはこの《une petite non baptisée》とは一体誰かということである。

スウリエはこの点について、もしこの子が父ジョゼフ・ベジャールの死後に生れた子であったなら、この遺産放棄の誓言には当然《enfant posthume》と書かれたはずであるが、恐らく父の死の直前に生れたのであって、そうしたとりこ

1) *ibid.* p. 89.

2) Soulié, *ibid.* p. 172. Doc. VIII.

みから洗礼が遅れたので、この子が生れたのは1643年の初めか、1642年の末ということになり、ベッファラの発見した acte de mariage でもアルマンドがマドレーヌの妹となっていることから、スウリエはアルマンドはマドレーヌの妹であると決定している。

この《une petite non baptisée》が後年モリエールの妻となったアルマンドであるということは一般に認められており、間違いがないと思われる。そしてアルマンドがマリ・エルヴェの娘であり、マドレーヌの妹であるという点では、ずっと後の証書に至るまで皆同じで、疑をさしはさむ余地がないように見える。

ところが、この遺産放棄の誓言には明らかに虚偽の申し立てが行なわれていると見られるふしがある。それは、この誓言の中のジュヌヴィエーヴ以下は、ジュヌヴィエーヴが1642年7月2日に生れたのだから関係ないが、マドレーヌは1618年1月8日に洗礼を受けているからこの時25歳で、息子のジョゼフ・ベジャールの方は、acte de baptême が発見されていないので確かな年齢はわからないが、この誓言の筆頭に名前が載っている点からみて恐らく1616年か17年頃生れたものと推定される。そうすると、このジョゼフとマドレーヌは、誓言の中でいわれている《mineurs》では実際はなかったということになる。

この事実を、もはや未成年者ではなくなったジョゼフとマドレーヌのために、別に放棄の手続をする手間を省くために、あとの子供たちと一緒に《mineurs》としてしまったと仮定しても、虚偽の陳述がある以上、こうした証書類は一体どこまでが本当でどこまでがうそなのか、見当がつかなくなる。

1) アルマンドの出生年月については、後に、1700年11月30日の死亡に際しての Saint-Sulpice 教会の registre に記載された acte のところで再びふれることになる。

2) Soulié: Ibid. p. 33-4.

3) アルマンドという名前は、今日存在している資料の中では結婚契約書に初めて現われている。この《une petite non baptisée》がアルマンドとしても、結婚の時まで彼女に関する資料は何もない。そこで日付のない(メナールは1659年のものと推定している) Chapelle の Molière 宛の手紙に現われている Mlle. Menou が後年の Armande ではないかという説があるが、これは Françoise=Armande という説にくらべて、全く誤りであると断定はできないが、Mlle. Menou の出生がわからない以上、解決は不可能である。

4) Notes de Beffara et de M. A. Jal. cité par Soulié: Ibid. p. 33.

5) Idem. Ibid. Soulié: Ibid. p. 32.

6) Mesnard: Ibid. p. 254, Mongrédién: Ibid. p. 97.

ここでマリ・エルヴェが事実反して二人を《mineurs》としている位だから、この《une petite non baptisée》が、実はマドレーヌの娘でありながら、何らかの理由で、マリ・エルヴェの籍に入れたのではあるまいかという疑問も生じてこよう。そして一度そうしてしまった以上、最後まで辻褄を合わせたのだとも考えられる。

アンリ・シャルドンは、これより9ヶ月前、1642年の7月下旬モンフランでルイ13世の御前公演が行なわれたが、この頃地方劇団の舞台に立って南仏を廻っていたマドレーヌが、その頃コンタ・ヴネッサンにいたらしいモデーヌ伯と一時よりが戻って生れたのがこの娘ではなかろうかと推測している⁽¹⁾。

マドレーヌとモデーヌ伯との間には1638年7月3日にフランソワーズという子が生れており、同月の11日に洗礼を受けている。この子の acte de baptême の欄外にはっきりと Françoise illégitime と書かれており、モデーヌは1642年になってこの子を正式に認知している位であるから、もしこの《une petite non baptisée》がシャルドンの推定するようにモデーヌの子だとしたら、なぜこの子に限って出生をごまかすようなことをしたのであろうか。⁽²⁾

アルマンドをマドレーヌの娘とした場合、マドレーヌがその出生を隠した理由としてつぎのようなことが考えられる。それは、マドレーヌがモデーヌと正式に結婚したいという希望を持っていて、モデーヌ以外の男たちとのあやまちを隠そうとしたかも知れないということである。しかし、当時モデーヌは妻が20歳も年上だといっても正式に結婚している身なので、この理由は薄弱とみられる⁽³⁾。

また、もしこの子がモデーヌのものとしても、正式に結婚している身では二度目ともなればフランソワーズの時のように認知できなかったので、マドレーヌは自分と子供の将来に傷がつくのを恐れて詐ったともとれる。

しかし、いづれにしても臆測の域を脱しないものであり、またマドレーヌがこ

1) 小場瀬卓三先生: Points obscurs de la vie de Molière, Chap. II. § 1.

2) この Françoise が Armande だという説があるが、これも Madeleine が Molière と Armande との結婚に反対したという仮説同様、Molière をいまわしい議論から救おうとする架空な物語りにすぎない。Soulié は Béjart 一家と親しくなかった人達が、この Françoise と、Madeleine が育てた妹の Armande とを、それに彼女の最初の amant であった Modène 伯と Molière とを混同したことから生じた誤解だと解釈している。Soulié: Ibid. p. 74.

3) Chardon: La troupe du roman comique dévoilée p. 13. Modène の妻の acte d'inhumation は 1649 年 2 月 9 日付で、第二の結婚は 1666 年 10 月のことである。

の時期に地方劇団に加わっていたとするには、極めて疑わしい点もあり、これを否定する積極的な根拠となる資料もないから、シャルドンの推定は臆測の域を出ないものである。

アルマン드의出生にまつわるもう一つの問題点は、マリ・エルヴェがアルマン드를生んだとするには、彼女があまり高齢すぎはしないかということである。

1670年1月3日付の彼女の acte de décès では、享年80歳となっているが、そこからアルマン드를生んだ時の彼女の年齢を逆算すると52歳となるから少し高齢すぎるともいえるが、これ位の年齢での出産は医学的にいてありえないことではないし、また彼女が、アルマン드를除外しても、今日確認されているところでは10人の子宝にめぐまれたほど féconde な女であり、アルマン드의生れた1643年頃に近い1639年にもベニーニュ・マドレーヌという娘を生んでいることから、ありえないこととは言えない。⁽¹⁾

第二に問題とされる資料は、ベッファラの発見した acte de mariage とスウリエの発見した contrat de mariage⁽²⁾ である。

この両方の資料とも明確にアルマン度はジョゼフ・ベジャールとマリ・エルヴェの娘であると述べている。この両方に、家出同様の形で劇団生活にとびこんだモリエールに対してきびしいはずの父ポクランと弟アンドレ・ブッデの名前が見えることは、この結婚に inceste などといういかがわしい点がなかったことを裏書きしていると思われる。しかし奇妙なことは、この両方の資料に、ベジャール家側でただ一人ジュヌヴィエーヴの名だけが見えないことである。

前に見たように、グリマレの伝記ではモリエールとアルマン度の結婚に反対したのは前にモリエールの愛人だったマドレーヌだったとしているが、スウリエ

1) Armande の死亡年令が誤まって記されていたように、Saint-Pol の墓場の Marie Hervé の épitaphe も75歳で死んだと刻み込んである。もし75歳で死んだとすると、Armande を47歳で生んだことになり、可能性が強まって来る。Larroumet の調べたところによると、épitaphe の年令は73歳というのが正確らしい。La Comédie de Molière p. 72. N. 1.

2) ここで初めて正式に出て来るこの《Armande-Élisabette-Grésinde Béjart という名前のうち Grésinde という珍しい prénom が Madeleine の prénom にもあるということから二人の filiation が考えられるが、Marie Hervé がこの prénom が気に入っていて二人につけたと考えられるし、Soulié は1643年の Chatelet のある acte の中でこの名を発見しているから格別珍しい名前ということでもないらしい (Soulié, ibid. p. 98, N. 4)。Élisabette という prénom の方は1620年に生れた同名の子がいるから、これが家族の prénom だったということがわかる。

はこれに対して、この事実から結婚に反対したのは、両方に姿を見せないジュヌヴィエーヴではないかという仮説を立てている⁽¹⁾。すなわち、モリエールとマドレーヌとは、モリエールが芝居道にふみ切った時代から関係があったが、マドモワゼル・エルヴェことジュヌヴィエーヴはペッフアラが新らしい資料を発見するまではほとんど知られていなかった⁽²⁾ので、それまでのモリエール伝ではマドレーヌとジュヌヴィエーヴとを混同していたのではないかと言うのである。

しかしスウリエ自身も認めているようにこれは極めて証明困難な仮説である。ジュヌヴィエーヴが1月23日と2月20日の両日に具合が悪かったと考えるのはあまり偶然的すぎる。彼女が他の列席者《d'autres》という記述に入っているか、この結婚に対して何か一寸した気にくわれない点があった位にしか考えられない。

このことに関連して、ジュヌヴィエーヴがレオナルド・ド・ロメニと結婚した時の *contrat*⁽³⁾ とアルマン드의 *contrat* とを比較してみると、アルマン드의持参金とジュヌヴィエーヴのそれとでは差が大きすぎるのが目立ってくる。

アルマン드의結婚契約書では、マリ・エルヴェは母親としてモリエールに10,000リーヴル・トゥルノワを与えており、モリエールはそれから5月後の1662年7月24日、それを受けとったことを認めている。これは未亡人としては大金である。彼女は、前に見たように遺産放棄をしているから、夫からは少しもうけていないはずである。彼女がパリに持っていた不動産も《Illustre Théâtre》の失敗によって抵当として差出していたので戻って来なかったであろう。その後モリエールや彼女の子供たちがそれだけの金を返したかも知れないが、それにしてもアルマン드의持参金の額は大きすぎる。

同じ娘でありながら、2年後の1664年に結婚したジュヌヴィエーヴの持参金はその半額にも満たない4,000リーヴル・トゥルノワであり、そのうちの3,500リーヴルは着物、下着、家具類であって、現金は500リーヴルであるから、アルマン드에較べれば全く無に等しい額である。おまけに契約書ではこの500リーヴルでさえ母親から与えられたものだとは記していない。するとジュヌヴィエーヴ

1) Vitu, Houssaye も Geneviève と Molière とは関係があったとしている。「Molière は Madeleine に惚れたが、彼女には Modène 伯という *amant* があって、Molière は彼女の妹の Geneviève と関係を結んだ。」しかしこの説は、Molière を *inceste* から救われとするあまりの熱意の作りだした仮説にすぎないように思われる。

2) Soulié, *Ibid.* p. 85.

3) *Idem*, *Ibid.* Doc. XXXIII.

自身がこの金を出したのだとも考えられるわけである。

前のアルマン드의契約書に見られる大金をマリ・エルヴェが出せないとなると、マドレーヌを措いてそれが可能な人間は考えられないことになる。そして、もしマドレーヌが実際に出したのだとすると、同じく妹でありながら一方のアルマンには多すぎ、ジュヌヴィエーヴには少なすぎることに、さらに後にふれるマドレーヌの遺産が、ベジャール一家のだれよりもアルマンに対して気前がよすぎることに照らし合わせて考えると、アルマンの結婚相手が他ならぬモリエールであったことを斟酌したとしても、戸籍面では妹でありながら実は娘のアルマンに、母親として自然に大額の持参金を出す気になったことは容易に想像しうるところである⁽¹⁾。

マドレーヌのそうした態度は1672年1月9日の遺言書と、2月14日の遺言追加書⁽²⁾にもはっきりあらわれている。ここに二人の親子を見ようとする説にミショーは反駁して次のように述べている。

アルマンが生れた時にマドレーヌはフランソワーズを失ったばかりだったので、アルマンに対して自分の子供に対して抱いていた全愛情を傾けたのである。いわばアルマンの中にフランソワーズを見出したというわけである。そこでマドレーヌはアルマンを他の妹たちよりもかわいがって、娘のように扱ったのだという⁽³⁾。

スウリエの解釈は少し変っていて、マドレーヌはこの遺言書の中で教会に多額の喜捨を行い、極めて敬虔なキリスト教徒らしい願いを述べているから、マドレーヌとアルマンが姉妹であることをどんなに疑っていた人もこの事実から納得が行くはずだと言うのである⁽⁴⁾。

ミショーの解釈につけ加えて言うならば、この時、マリ・エルヴェが52歳という年齢でもあるし、マドレーヌが母代りの役を買ってでても不思議ではないが、いずれにしても、人情論の域を出ない論議であり、スウリエの解釈は、死に際の感情だけで過去を抹消できるような言い方で、何等の証拠もなく、ましてマドレーヌに *carrière galante* があったことは否定できない事実なのである。

1) ミショーは、マドレーヌがそれを与えたという確証がない以上、男が金持で女に財産がない場合の結婚契約書によくあるように、モリエールが承認した架空の持参金ではないかという仮説を立てている。

2) Soulié: Ibid. Doc. XL.

3) Ibid. p. 63.

4) Ibid. p. 69-70.

アルマンドの年齢に関する資料として、最後のものは、1700年11月30日の彼女の死亡に際してのサン・シュプリス教会の帳簿に記載されている acte ⁽¹⁾ である。それには、彼女の享年は55歳とされている。これから逆算すると、彼女は1645年に生れていることになる。しかしジョゼフ・ベジャールは1643年の初め頃死んでいるし、1662年の結婚契約書には《*âgée de 20 ans ou environ*》とあるから、辻褄が合わなくなる。

最後に問題となる資料は、いずれもベッファラの発見した、1664年2月28日のモリエールの長男⁽²⁾と1664年8月4日の娘⁽³⁾の acte de baptême である。

ここで注目すべき点は、長男の時には名付親としてルイ14世が立っていることである。もし、いかがわしい結婚の結果として生れて来た子であるとすれば、とうていルイ14世の名がここに見られることはあるまいから、この資料はモリエールの inceste の疑いをある程度晴らしてくれるものであろう。しかしアルマンドとマドレーヌの filiation までは否定するものではない。なぜならルイ14世自身の女関係、特にルイーズ・ド・ラ・ヴァリエールとの関係を考えてみれば明白である。王は単に、お抱え作者であり且つ *tapissier du roy* である身内のモリエールを庇護するために顔を出しているにすぎないと解釈される。こうしたことはこの時代の宮廷生活ではそう珍しいことではなく、単なる習慣と見做さるべきものであろう。

二番目の子の名付親としてモデーヌ侯爵とマドレーヌ・ベジャールの名前がみえる。モングレディアンによれば、二番目の子供には祖父、祖母が名付親として立つ習慣があったというから、アルマンドとマドレーヌの filiation をうちたてるにはもってこいの資料とみえてくる。それにモデーヌが父親ということになればモリエールには inceste の汚名を着せなくてもよくなる。しかし、この解釈は単に習慣によって成立するのであって、この場合も習慣通りに事が行なわれたかどうかを断定することはできない。ミショーは、モデーヌが名付親となっているのはまだマドレーヌと友人であったからだし、またモリエールもモデーヌのような立派な身分の人に名付親に立ってもらうのを喜んだからだ⁽⁵⁾と解釈している。

1) Histoire de Molière par Taschereau. 3^eéd. p. 236. cité par Soulié: Ibid. p. 105.

2) Mesnard: Ibid. Pièces justificatives IX. p. 472.

3) Idem, Ibid. XII, p. 474.

4) Ibid. p. 99.

5) Ibid. p. 158.

以上見て来たように、一方には正式な証書の中でアルマンドはマリ・エルヴェの娘であると立派に記されているにもかかわらず、モリエールはなぜ幾多の中傷、誹謗を前にして沈黙を守ってきたのであろうか。

モンフルリィには告訴までされているが、こうした立派な証書がある以上、その写しを提出するだけで解決するはずであるが、そうした形跡は残っていない。あるいはわれわれが知らないだけで実際には答えていたのだろうか。《Élomire hypocondre》の初版に対してモリエールが国王に発禁の請願を出したというのも仮説にすぎない。

ここで考えられることは、第一、公正証書を持ちだしてみたところで中傷を止めさせられるかどうかわからない。かえって騒ぎを大きくすることさえある。それに、ガストン・パリスの言うように、この問題を公に論じたらマドレーヌの愛の遍歴を⁽¹⁾あばき出す結果にもなりかねない。

よし、モリエールの沈黙が騒ぎを起こさせないためのものであるとしても、無根に対する沈黙とも、事実に対する沈黙とも解釈される。そして、この沈黙は、inceste の罪に対してではなく、マドレーヌの愛の遍歴と、アルマンドとの filiation を明るみにだしたくなかった galanterie からのものではなかろうか。

モリエールを incete の汚名から救わんとして、しばしば無理な仮説がたてられている。そしてそのために、モリエールが父であることを除外視した単なるアルマンドとマドレーヌの filiation 自体までが曲解されているうらみがありはしないだろうか。二人に filiation あり、と断定する決定的な資料はもちろん今のところ存在していない。モリエールの parenté はあり得ないとしても、当代の証言、特にボワローの証言と証書類に喰い違いがあり、また証書自体にも虚偽の申請や辻褃の合わない点もある以上、マドレーヌとアルマンドに filiation があるとする仮説を消し去ることはできないのである。

1) Revue critique, 3 août 1873.